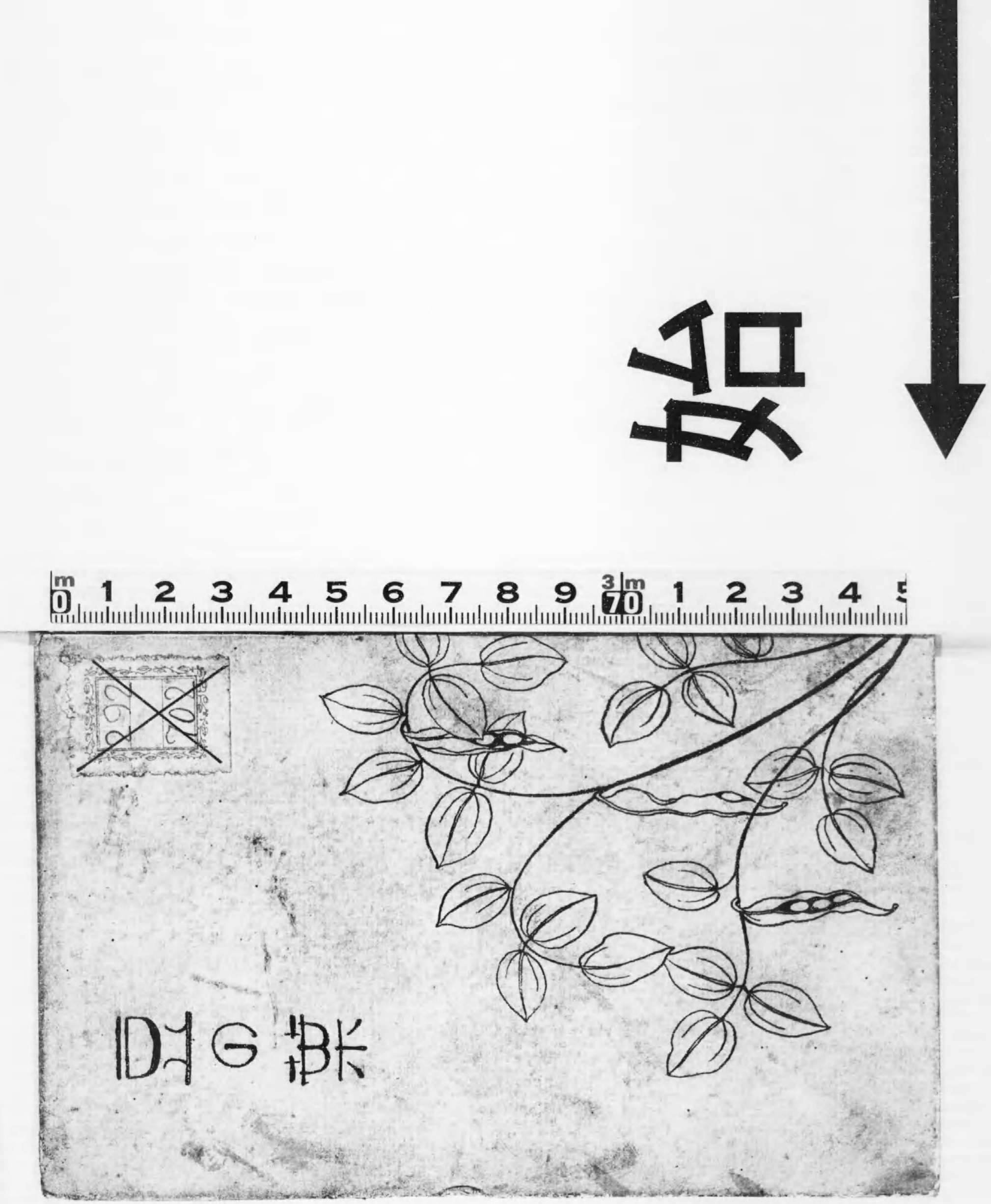

特111
264

野口雨情氏序
大關五郎氏跋

民謠集

豆の葉

益子德三作

大正
15. 10. 16
内交

豆の葉のはじめに

本書の著者は、その自序中に「私の民謡は私の生命であり糧である」と言つてゐる。著者にこのしんけんな意氣があればこそ民謡が生れて來るのである。

民謡は小唄や小曲の如く、たくみに美辭をつらね、いたづらに美語を弄したからとて、ただちに民謡と言ふことは出來ないのである。

民謡には民謡本來の特質がある。淡い情緒は用語の技巧によつていざなふことも出來るが、民謡の特質は淡い情緒ではない。灼くが如き情熱にあるのである。

しかもその情熱が詩情を通して發せられたとき、はじめて民謠が生れるのであるから、本書の著者が言はれた如く、全く民謠は作者の全生命であり生きた魂でなければならない。

大正十五年秋

野口雨情

自序

民謠は土に生れ、歌ふべく踊るべきもので、必讀の詩ではない。故に民謠は直に民衆と握手し、人間生活の唯一伴侶となり、永遠に消滅することがない。

民謠を歌ふとき、踊るとき、寥、惱、悲、苦總てを忘れ得る。故に民衆は民謠を放つことが出來ない。人間生活の唯一慰安者であるから。

餘りにも淋しく、餘りにも嬉しきときに於て、民謠の價値は充分に發揮されるのである。

わたしは可成り大膽に處女作『豆の葉』を發刊した。私の民謠は私の生命であり糧である。故にわたしは不斷に努力と研究とに精進してゐる。

本集出版にあたり、親しく序をお寄せ下すつた斯界の第一人者である野口雨情先生、及び大關五郎大兄の大なる御力添えに衷心から謝意を表する。尙高橋太郎兄の裝幀に心を勞して下すつたことも厚く感謝する。

終りに金子辰兄、中島允兄の此の詩集發刊までに執られたる勞と、田代一郎氏の出版に便宜を與へて下されたことに對しても、私は感謝に堪へない。

一九二六、九、一　　池袋にて　著者

民謠集　豆の葉

豆の葉のはじめに
跋　野口雨情氏
装幀　大關五郎氏
自序　高橋太郎氏

著者

豆の葉目次

筑波颪

筑波颪……三
淺間の煙……五
鳥……七
細い雨……九
お竹……一一
浮草……一三
ほうほう鳥……一五
娘……一七
生花……一九

うす情……二一
父母さま……二三
丸子渡し……二五
遠い君……二七
女……二九
おしげ……三一

一羽の鳥

一羽の鳥……三五
私の心……三七
曇つた空……三九
祭唄……四一

すすきの雨……四三
葛飾の花……四五
轉居……四七
便り……四九
赤城の山……五一
山櫻……五三
お初……五五
夕の雲……五七
影法師……五九
雪路……六一
なんの鳥かよ……六三
流れの水……六五
娘心……六七

木瓜の花

木瓜の花……七一
君の名……七三
菖蒲の笛……七五
あり明お月……七七
おみよ……七九
指環……八一
田の草とり……八三
汀の花……八五
紅い花……八七
里の花……八九
若草……九一

枯れ葦……九三
語り草……九五
淺宵……九七
三味線草……九九
花瓶の花……一〇一
雪……一〇三

離れ島

離れ島……一〇七
平井の日暮……一〇九
初戀……一一〇
若い身空……一一二

櫛……一二五
山つつじ……一二七
化粧したとて……一二九
ほととぎす……一三一
男の念力……一三三

（目次終り）

筑波風

筑波颪

牛久多枯れ
田甫は風だ

君は東よ
私は西よ

筑波颪に
なかされながら

離ればなれに
すんでゐる。

淺間の煙

淺間山から
たつあの煙
今日も今日とて
なびいてる
大丸(だいまる)製絲の
女工さん可愛い

戀の小唄を
うたつてる

可愛い小唄を
きいてるやうな
淺間山から
たつ煙。

鳥

背戸の榧の木に
來てなく鳥は
誰も居ぬとき
ばかりなく。

細い雨

小娘の
さした蛇の目に
雨がふる

細いこの雨小娘の
つらい別れの
雨でしよか

夕暮れの
雨に蛇の目が
遠ざかる。

お竹

お竹十八
可愛い娘
昨夜(ゆうべ)おかしな
夢を見た
お竹十八
草刈り娘

昨日見た夢
氣にしてる。

浮　草

浮草は
どこへ流れて
いつたやら

ほんのり淡いカフエーの
浮草だとは
知つてたが

誰にどうして誘はれて
何に焦れて
いつたやら。

ほうほう鳥

お背戸の畑に
啼く鳥は
どうしてあんなに
啼くのでせう。

今日も畑に
ほうほうと

ほうほうほうと
啼いてゐる。

娘

桃割れ髪に
長い袖
厚化粧した娘さん
誰に見せよと髪ゆうた
誰に見せよと化粧した
おすきなお方が

出來たのか
厚化粧した娘さん。

生花

可愛そうとは
生花(いけはな)さ
何も知らずに
咲いてゐる
いやになつたら
捨てられる

花が散つたら
捨てられる
可愛そうだよ
生花は
何も知らずに
暮らしてる。

うす情

糸の細さに
泣けばとて
誰がなきましよ
袖ぬらそ
おぼろ月夜の
うす情

わが身は細い
糸だもの・

父母さま

便りききたい
きかせもしたい
里にのこした
父母さまは
うわさ聞くたび
泣いてるだろか

知らぬ國から
知らない國へ

あなた一人を
たよりの旅も

なぜか戀しい
父母さまよ。

丸子渡し

東京なつかし
丸子の渡し
渡し渡れば
東京の町よ。

なぜか歌はぬ
船頭さんは

東京はいやだと
涙でいふた。

流れ渡しに
竿さす人の
言葉氣になる
東京の町よ。

遠い君

甲州山國山のかげ
山のかげなる
町戀し

別れともなく別れたる
遠い君ゆゑ
なほ戀し

武藏の原に照る月も
淋しいものと
なりました。

女

窓の格子に寄るたびに
思へば思へば
やるせない

やつれ果てたよ
末枯(すが)れたよ
四年位になりませう

妾はほんとに情ない
なじよにしたなら
いいんでせう
やつれ果てても
末枯れても
妾はやつぱり女です。

おしげ

ほんとうに
たづねてくれて
嬉しいと
おしげ娘は泣きました。
ねくたれ髪を
そのままに

枕ぬらして
泣きました

一羽の鳥

一羽の鳥

様よ様よと
南の方へ
鳥がとびます
夕暮れに
様よ様よと
南の空へ

たつた一羽の
鳥がとぶ。

私の心

逢つたときから
私の心
あなた戀しい
私の心
云ふに云はれぬ
私の心。

曇つた空

降りもしないし
照りもせぬ
見れば淋しい
冬の空
どうせ逢へない
ものならば

ふつておくれよ
白い雪。

祭唄

村の鎭守さま
豐年祭り
花車も出るぞい
さあこらさ
鎭守祭の
揃ひの姿

花笠かぶつて
さあこらさ

今日はめでたい
豊年祭り
おいでなされよ
さあこらさ。

すすきの雨

すすきをばなに
ふる雨は
むせび泣くよに
聞えます
歸らぬ人の
なくのでせう

すすきをばなに
ふる雨は。

葛飾の花

一度
みたさに
葛飾までも
お前
はるばる
たづねて來たに

風にふかれて
そ知らぬ
そ振り
お前つれない
あやめの
花よ。

轉居

貸家(かしや)の背戸の
かしの木に
小鳥がないて
居りました。
便りくれずに
君様は

どこへうつつて
いつたやら。

とぎれとぎれに
日暮れまで
小鳥がないて
居りました。

便り

忘れてお呉れと
仙臺の
便りをくれたあの娘
別れるときの
あの涙
やつぱり嘘であつたのか。

赤城の山

遠い赤城の
山見れば
思ひ出すぞい
君様を

曇りや見えない
山なれば

遠い君様
なほ戀し。

山櫻

誰が見るだろ
あの山櫻
そつと可愛い
花つけた。

お初

一緒に死ぬかと
いつたとき
なんにもいはずに
うつむいた

お初思へば
身が燃える

夢のうつつの
身が燃える。

夕の雲

ゆうべの雲は
あの雲は
どうして色が
變るでせう
荒野のはてに
君思ふ

今日の私は
うら淋し。

影法師

窓に女の
影法師
毎晩毎晩
影法師

琴の音色につまされて
やさしい姿にひかされて

明け暮れ淋しい
この胸に
忘れられない
影法師。

雪路

雪の上に
相合傘が
書いてある
書いてある
傘みて私は
なきました

誰でせう
ひとの心も
知らないで。

なんの鳥かよ

赤い空だよ
夕日ヶ岡は
八百屋お七の思ひで燃える
なんの鳥かよ
夕日ヶ岡を
吉三ぶじかとなき〳〵過ぎた

流れの水

川の流れを
見てゐたら

胸に涙が
湧いて來た

流れの水とは
知りながら

あの娘(こ)のことが
思はれる。

娘心

枝垂れ柳に
ふく風は
どこから吹いて
來るのやら
末通(おぼこ)娘だ
柳の枝は

風にまかせて
ゆれてゐる。

木瓜の花

木瓜の花

荒野に紅い
木瓜(ぼけ)の花
夜ふけ夜露に
濡れました。

荒野に咲いた
木瓜の花

いつかやつれて
居りました。

君の名

白い土藏に
影一つ

小石拾ふて
君の名を

書いてまた消し
影一つ。

菖蒲の笛

おぼろのお月さん
菖蒲の笛が
今も心に殘つてる
笛を聞いてた
あの娘の姿
今も心に殘つてる。

あり明お月

ぼんやり有明
お月さん
夜通しねないで
ゐたかいな
あしの葉かげの
ささやきを

昨夜(ゆうべ)覗(のぞ)いて
あたかいな
見たら見たで
お月さん
誰にもはなさず
ねておくれ。

おみよ

今日も一日
一人でさくる
さくりや冷めたい
畑の土だ
死んでしまへば
畑の土だ

可愛おみよも
畑の土だ

おみよ死んでから
一年たつた
なぜに冷めたい
畑の土よ。

指環

指環かたみに
別れた戀よ

かたみの指環に
昔が戀し

指環かたみに
別れた戀よ

細い指環に
泣かされる。

田の草とり

稻は育つた
田の草のびた
伸びた田の草
取らねばならぬ
白い手拭
たすきをかけりや

思ひ出される
留さんが。

汀の花

咲いて散つたる
汀の花よ
誰に焦れて
この世に咲いた
汀水鳥
渡りの鳥も

お前慕ふて
飛んでくる。

紅い花

千波の沼に
咲く花は
常陸娘の
かくれ咲き
誰が摘もうと
つむまいと
心羞し

紅(べに)の花。

里の花

村の小娘
梅の花
誰に見られた
梅の花

篠やぶ小やぶに
うぐひすが

若草

茎は枯れても
根は枯れず
若芽若草
のびました
淋しい野邊に
今日までを

今日はさびしく
ないてゐる。

しのんで君を
待ちました。

枯れ葦

汀に枯れた
葦の葉に
所さだめぬ
風がふく
汀に枯れた
葦の葉に

はかない思ひの
風が吹く。

語り草

背戸の木小屋の
かたわらで
「お前捨てぬ」と
語り草
今は心が
空ふく風よ

妾しや野ざらし
語り草。

淺宵

何にあこがれ
淺宵に
銀座の町へ
參られる
お寄り下され
カフエーに

妾しや咲く花
紅い花。

三味線草

茅ヶ崎の
宿場はづれの松なみき
松の木かげの
三味線草(さみせんぐさ)は
涙でぬれてをりました。
南風(はえ)吹けば

お江戸街道の道ばたに
なぜかしらない
三味線草(さみせんぐさ)は
露を落してをりました。

花瓶の花

あなたの愛に
たをられて
花瓶の花に
なりました。
香り失せれば
すてられる

花瓶の花に
なりました。

雪

雪がふりました
あの峯に
娘戀しと
降りました
北のお國の
若衆の

思ひをこめて
あの雪は
娘戀しと
降りました。

離れ島

離れ島

離れ島でもョー
日本の土だ
月に一度の
傳馬船
離れ島ゆゑョー
戀しゆてならぬ

傳馬船見りや
身が燃える。

平井の日暮

平井日暮れる
鳥や啼いて歸る
なぜかつめたい
風が吹く

やつと平井まで
來たには來たが

お月や半分
かけてゐる。

初戀

初戀でせう
こほろぎの
唄にしみじみ
ききゑれた
初戀でせう
こほろぎの

唄をきくさへ
身がおどる。

若い身空

朝顔の
花が咲いたよ
しぼんだよ

娘達
悲しくないか
はかなさが

朝顔の
生命(いのち)にもにた
身空だよ

娘達
俺は淋しく
なつて來た。

櫛

かけたお月に
よう似てる
路次に落ちてた
あかい櫛

やるせないだろ
可愛そに

昨夜(ゆゝべ)も忍んで
來たんだろ

あのあのかけた
あの月に
今夜も忍んで
來るだろか。

山つつじ

町は遠いし
山中つつじ
紅く咲いても
思ひにぬれる

どうせこの身は
山中つつじ

かわくまもなく
雨がふる。

化粧したとて

化粧したとて
涙が滲む
いやな殿御に
添ふとなりや
何も縁だと
もうあきらめた

どうぞゆるして
下さいよ。

ほとゝぎす

死のう死のうと
思つても
なぜか死なれぬ
ほとゝぎす

月の照る夜は
川岸で

月のない夜は
路次でなく

思ひ殘しちや
死なりやせぬ
やつれ果てても
ほととぎす。

男の念力

惚れた惚れたよ
心(しん)か惚られた
惚れて添ひなきや
心は暗だ

それならそれなら
どうするね。

惚れた惚れたよ
心から惚れた
男の念力
見てござれ
どうするどうする
それならね。

跋

常陸の八溝山には、今でも鹿がゐるといはれてゐる。益子君は、その山に近い草深い田舍に生れた人である。益子君は、煙草や、蒟蒻などの收穫を心配する人達の中に育つた。やがて、益子君は、東京に出て白き手の勞働者となり、現在もその生活をつづけてゐる。

今度民謠集『豆の葉』を世に送る益子君は、どんなに嬉しいだらう。益子君に光榮あれ。

大正十五年九月二日晩
東京中野にて

大　關五郎

豆の葉終り

大正十五年九月二十七日印刷
大正十五年十月十日發行

（定價八拾錢）
（送料六錢）

豆の葉

著者　益子德三
發行者　東京市神田區表神保町拾番地　川村鐵次郎
印刷者　東京市外池袋九二四番地　田代一郎
印刷所　東京市外池袋九二四番地　正明舍印刷所

發行所　東京市神田區表神保町拾番地　恒星堂書店
振替東京六三七三三番

終